

『今昔物語集』原話と「羅生門」との比べ読み学習

―「古典探究」での授業実践として―

渡 邊 寛 吾

一 「羅生門」との比べ読み学習の課題

高校一年「言語文化」、以前であれば「国語総合」の教科書には「羅生門」が載り、その学習がほぼ必須のこととして行われているであろう。そして、そこには原話の比べ読みが発展学習として提示されている。だが、果たしてこの比べ読みは実際の授業としてどれくらい行われているのだろうか。「羅生門」の学習が非常に高い割合で行われていると想定されるのに対して、原話との比べ読みの実施は低いものと想定する。その様な想定の下で、本稿は高校二、三年「古典探究」でその原話を学習し、その上で比べ読みを行う授業実践を提案するものである。

「羅生門」と原話との比べ読み学習がそれ程行われていないであろうとの想定は、比べ読み学習自体が持つ課題による。その課題とは、授業時間の確保の難しさである。何故なら、比べ読み学習では複数の文章を読むことになるので、ある文章を読解する授業時間にもう一つの文章の読解の時間が加わることになる。このことが比べ読み学習

の有意性が認められながらも、積極的に行われない理由であろう。つまり比べ読み学習を実施するためには、この課題が克服される必要がある。

具体的に「羅生門」の学習時間について、教科書の出版社がどのように設定しているのかを確認してみる。例えば、数研出版の各「言語文化」教科書では三時間乃至は四時間が、筑摩書房の「言語文化」教科書では二時間、大修館書店の各「言語文化」教科書では二から五時間が設定されている。もし、二時間で「羅生門」を学習するならば、そこで『今昔物語集』の原話との比べ読みの学習はできないであろうし、四時間や五時間の設定であっても各場面の表現や下人、老婆の心情を押さえながらの読解中心の標準的な授業では、それだけで手一杯の時間となり、比べ読みをするためには後数時間が必要であると考ええる。もしこの時間数で比べ読みも行うとすると、「羅生門」全体の内容の読解ではなく、比べ読みのために設定した読解の授業としなければならないであろう。

自分自身が高校教員をしていた時のことを思い出しても、「羅生門」の読解に六、もしくは七時間程度を基準として実施していたように思う。そうすると、比べ読みを行うには、原話を読み、その解説と比較検討、内容のまとめや感想を書くなどの学習を行うと二時間超の時間が追加され、結果として八時間相当の授業時間となる。一つの文学作品の読解で八、九時間を費やすのはなかなか難しい要求ではないだろうか。仮に比べ読みを前提として六時間で授業を構成するならば、読解に四時間程度、生徒の学習力次第で可能かもしれないが、一般的な学力を想定すると「羅生門」自体の読解時間を削ってまで行うべき学習であるか、難しい判断になると考える。ここでも自身の経験を述べるならば、「羅生門」の学習において原話との詳細な比べ読みは行ったことは無く、学習の最後に原話と現代語訳を纏めたプリントを配布して、生徒に読むことを促すのが精一杯であった。

次に課題と考えることは、原話である『今昔物語集』の「羅城門登上層見死人盗人語」、「大刀帯陣売魚姫語」を古文として読むことが、一年生のこの時点では難しいと言うことである。

「言語文化」の教科書九社全十七冊の内、十六冊と第一学習社の「現代の国語」の一冊が「羅生門」を載せ、その内、第一学習社の教科書四冊を除く八社十三冊の教科書が発展学習として「羅城門登上層見死人盗人語」との比較を載せる。そこでの掲載状況としては原文のみを掲載するのは七冊、現代語訳だけが一冊、両方を載せるものは五冊ある。しかしながら、「羅生門」は高校一年生の、多くは一学期に学習するもので、この時点の高校一年生はまだ古文の学習を始めたばかりの状態、後に載せるようなこれらの古文を古文として読解していくことは大半の高校では困難と考えられる。結果として、「羅生門」の学習時の比べ読みは現代語訳を読むことが前提となるはずである。このこと、現代語訳であっても、内容の理解ができれば比べ読みをする上で特段問題とはならず、比較対象として十分に学習を行うことはできるであろう。しかしながら、『今昔物語集』という古文を提示しておきながら、現代語訳だけで終わらせることは非常に惜しいことではないかと思うのである。

以上のことから、一年生で「羅生門」の比べ読みをした際に生じる時間と古文の読解力の制約を回避する方法として、二年生の「古典探究」の授業で「羅生門」との比べ読みをすることを提案したいと思う。

二 授業実践の解説

まず、「羅城門登上層見死人盗人語」と「大刀帯陣売魚姫語」の本文を載せる。以下の本文は新編日本古典文学全集『今昔物語集』（小学館）を参考に、筆者が表記を教科書に合わせて調整して作成したものである。

らせいものうはしにのぼりてしんをみるぬすびとのこと

・「羅城門登上層見死人盗人語」（『今昔物語集』巻二十九第十八）

今は昔、摂津の国の辺より盗みせむがために京に上りける男の、日のいまだ明かりければ、羅城門の下に立ち隠れて立てりけるに、朱雀の方に人重く歩きければ、人の静まるまでと思ひて、門の下に待ち立てりけるに、山城の方より人どものあまた来たる音のしければ、それに見えじと思ひて、門の上層にやはら搔つり登りたりけるに、見れば、火ほのかに燃したり。

盗人、「怪し。」と思ひて、連子より覗きければ、若き女の死にて臥したるあり。その枕上に火を燃して、年いみじく老いたる姫の白髪白きが、その死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取るなりけり。

盗人これを見るに、心も得ねば、「これはもし鬼にてもぞある。」と思ひて恐ろしけれども、「もし死人にてもぞある。恐して試む。」と思ひて、やはら戸を開け、刀を抜きて、「己は。己は。」と言ひて走り寄りければ、姫手惑ひをして、手を摺りて惑へば、盗人、「これは何ぞの姫のかくはし居たるぞ。」と問ひければ、姫、「己が主にておはしましつる人の、失せ給へるを、縋ふ人の無ければ、かくて置きて奉りたるなり。その御髪の長に余りて長ければ、それを抜き取りて鬘にせむとて抜くなり。助け給へ。」と言ひければ、盗人、死人の着たる衣と姫の着たる衣と抜き取である髪とを奪ひ取りて、下り走りて逃げて去りにけり。

さてその上の層には死人の骸骨ぞ多かりける。死にたる人の葬りなどえせぬをば、この門の上にぞ置きける。このことはその盗人の人に語りけるを聞き継ぎてかく語り伝へたとや。

・「大刀帯陣売魚姫語」(『今昔物語集』卷三十一第三十一)

今は昔、三条の院の天皇の春宮にておはしましける時に、大刀帯の陣に常に来たりて魚売の女ありけり。大刀帯どもこれを買はせて食ふに、味ひの美かりければ、これを役と持てなして菜の料に好みけり。干たる魚の切々なるにてなむありける。

しかる間、八月はづきばかりに大刀帯やつども小鷹狩りに北野に出でて遊びけるに、この魚売りの女出で来たり。大刀帯したみども女の顔を見知りたれば、「こ奴は野には何態わざするにかあらむ。」と思ひて、馳せ寄りて見れば、女大きやかなる籬しだみを持ちたり。また楚すはえ一筋を捧げ持ちたり。この女、大刀帯どもを見て、怪しく逃げ目をつかひてただ騒さわぎに騒ぐ。大刀帯の従者ども寄りて、「女の持ちたる籬には何の入りたるぞ。」と見むとするに、女惜しむで見せぬを、怪しがりて引き奪ひて見れば、蛇へみを四寸しすんばかりに切りつつ入れたり。あさましく思ひて、「こは何の料ぞ。」と問へども、女さらに答ふること無くして立たてり。

早う、こ奴のしけるやうは、楚やぶをもちて藪やぶを驚かしつつ、這はひ出づる蛇を打ち殺して切りつつ、家に持て行きて、塩を付けて干して売りけるなりけり。大刀帯どもそれを知らずして、買はせて役と食ひけるなりけり。

これと思ふに、蛇は食ひつる人悪しと言ふに、など蛇の毒くせぬ。

しかれば、その体てい確ていかになくて切々ならむ魚売らむをば広量くわりやうに買ひて食はむことは止とどむべし、となむこれを聞く人言あつかひ繚あつかひける、となむ語り伝へたるとや。

一読して明らかなように、話の筋立ては明瞭であり、またその文章には基本的な古典単語、そして助動詞や敬語などの文法事項が確認できる。高校二年生の最初の古文学習に説話が用いられることが多いことからして、これらの説話を「羅生門」との比べ読みから切り離したとしても、高校一年生段階での古文の学習を踏まえて、その定着の確認と応用として扱うことは十分に可能な教材で、一学期での学習に対応できるように思う。

なお一つ付言してきたいのは、「羅生門」との比べ読みの学習では「大刀帯陣売魚姫語」も併せて比べ読みをするべきであると言うことである。先に示したように、「現代の国語」の教科書の多くが「羅城門登上層見死人盗人語」との比較を載せるのだが、「大刀帯陣売魚姫語」まで載せるのは数研出版の二冊だけで、一冊は原文のみ、一冊は現

代語訳だけの掲載である。このことから、「大刀帯陣売魚姫語」が重要視されていないことが指摘できる。確かに、この話は老婆が髪を抜く死んだ女の生前の様子として利用されるもので、直接文章が利用されるものではないが、髪を抜かれる死体が老婆の主人の女から、蛇を魚と偽って売っていた女へと変更されたことは非常に大きな意味を持つことであり、一つ説話を読むための授業時間が増えることになるが、これも含めて授業を設定するべきであると考え。

では、次に授業の展開について述べていく。ここでは、それぞれの説話に二時間の学習時間を設定して、全体で六時間での授業構成とした。

- 【一時間目】 ・ 授業の目的説明／「羅城門登上層見死人盗人語」の本文読解①
- 【二時間目】 ・ 「羅城門登上層見死人盗人語」の本文読解②
- 【三時間目】 ・ 「大刀帯陣売魚姫語」の本文読解①
- 【四時間目】 ・ 「大刀帯陣売魚姫語」の本文読解②
- 【五時間目】 ・ 「羅生門」と『今昔物語集』原話との比較①
- 【六時間目】 ・ 「羅生門」と『今昔物語集』原話との比較②

一時間目冒頭では、この授業が高校一年生の時に学習した「羅生門」の原話である『今昔物語集』の説話を読み、比較を行い、原話がどのように「羅生門」として書き換えられているのか、創作されたのかを考察する授業であることを説明する。なお、そのために改めて「羅生門」を読んで来ることを宿題として提示する。以後、「羅城門登上層

見死人盗人語」と「大刀帶陣売魚姫語」の話を、ここでは各二時間での読解として、四時間目まで通常行われる古文読解の授業を行う。

そして、五・六時間目で「羅生門」との比較を行うのであるが、まずは生徒から両者の違いを指摘させ、原話が「羅生門」でどのように変更されているのかを確認する。その原話と「羅生門」との相違点を整理したものとして、藤田聡司氏に「羅生門」再読―原典との比較―（『愛媛国文研究』七三 二〇二三・一二）がある。そこでは「作品の時間」、「作品の空間」、「登場人物（主人公）」、「登場人物（老婆）」、「情景描写」、「下人の行方」、「語り手（もう一つの時間）」、「テーマ」として八つの項目でまとめ解説を行っている。項目の数や名称など、その分類には多少の相違はあろうが、基本的にはこの範囲に収まるものと考えられ、生徒からの指摘もこの中で対応可能であろう。ただし、老婆が髪を抜く死体が自分の主人であったのを、魚の干物と偽って蛇の干物を売っていた女に換えたことは、そこで扱うのが「原典との比較」のためか含まれていない。だが、次に記すように、この点は比べ読みをする上で重要なもの考える。

今回は内容の比較検討の時間を二時間と設定したが、二時間では八つの比較内容全てを検討するには時間が足りないであろう。授業の進み具合で適宜取捨選択することになるが、「羅生門」の読解において重要な点が、主人公の下人が生と死の間で自分の生き方について葛藤する、つまりは善の生き方をして死ぬか、悪の生き方をして生きていくかにあることからすると、やはり主人公と老婆が髪を抜く死人の変更は必ず押さえない。「羅城門登上層見死人盗人語」では主人公が元から盗人なので、悪事を働くことに葛藤はなく、対して「羅生門」でその葛藤が生まれるのは主人公が少し前まで下人であった普通の若者だからである。また、そのような普通の若者が悪の道へと進むのは、生きるためには悪いことをするのも仕方のないことと言う老婆の発言が最終的な決断を促すものとなるが、これは「大刀帶陣売魚姫語」を読んでいなければ、老婆の主人であった女性からの変更は理解できても、作者のこの変更

が何に因るものかがはっきりしない。それを明確にするためにも、「大刀帯陣売魚姫語」も読むべきであると考え。また、作者が全く別の話の要素だけを主とする話の中に取り入れて、小説を書くと言う創作の在り方を考える点から、やはり二つの説話を共に比べ読みの対象とする必要がある。

その後、時間内で他の幾つかの変更点についての考察をした上で、改めて「羅生門」についての感想や作者の創作上の工夫について感想文を書いて終わりとする。その時にはできれば、一年生で「羅生門」を学習した時に書いた自身の感想文と読み、今回の学習に因って理解や感想が変わったのか、どうかについて考えながら感想を書くように指導したい。

最後に、この授業の評価方法について述べる。まず、授業の最後に書いた感想文については、原話と「羅生門」とを比較し、授業で検討した点、指摘に留まった点など相違点がどのような意味を持っているかを、適切な分量で書いているかと言う観点から、それぞれの高校の状況に拠って評価をすればよいと考える。そして、二つの説話については従来同様に定期試験の問題文として出題し、古文の知識、学習内容の確認をすることで評価することを想定している。

三 まとめ

ここで記した「羅生門」の比べ読みの授業実践は以前より提示され、また行われて来たものである。しかし、実際に授業として比べ読みが行われることが少ないと想定されるのは、冒頭で記した通りである。

また、平成三十年度告示の学習指導要領で国語科に「古典探究」が新たに設置され、従来の文法と現代語訳とを主体とする読解中心の古典学習とは異なる学習が求められるようになった。今までの授業の内容と「古典探究」での

授業内容がどの様に、どの程度変化したのかは、まだ「古典探究」が二年目と言うこともあり今後の報告を待たなければならぬが、全体的な変化としては部分的なものに過ぎないのではないかと推測する。その理由として、教師の知識、指導経験、そして評価方法などの蓄積の不足が考えられる。その様の中にあって、ここで示した「羅生門」と説話の従来通りの読解後の比べ読み授業であれば、これまでの授業方法、指導の中に収まり、実際に授業を行うことへの課題もかなり少なくなるであろう。今後一層、「探究」を主とする授業が行われるべきであろうが、現状における実践可能な授業提案として、「羅生門」と原話との比べ読みを「古典探究」に移すことで授業時間と古文読解の課題を克服し、加えて探究活動とする授業案を提示した次第である。

なお、この授業案は、次年度以降に本学で行う「羅生門」の精読の講義に組み込むことを予定しているので、実際に授業として行った時の問題点や学習者の理解状況などについては、改めて報告することを予定している。